
桜花の約束

岩瀬馨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花の約束

【Nコード】

N6503V

【作者名】

岩瀬馨

【あらすじ】

「4年後、俺が東京から帰ってきたら、またこうして、この公園の桜を見ような？」

その約束を胸に、4年間の大学生活を乗り切った主人公、哲哉。久々の恋人との再会に胸躍らせて故郷へ帰るが、そこで待ち受けていたのは、あまりにも衝撃的な事実だった。

「なあ、恵？」

「何、哲ちゃん？」

「4年後、俺が東京から帰ってきたら、またこうして、この公園の桜を見ような？」

それが、俺と恵とが交わしたたった一つの約束だった。地元の公園にある、一本のとても古くて大きな桜の木。その前で、俺達は強く手を握り合いながら誓い合った。

「はあ、やっとついた！」

久々に降り立った、地元の無人駅。東京から新幹線で2時間あまり、それから電車を乗り継ぎ、ようやく、見慣れた風景のある無人駅へとたどり着いた。北側を見れば、冬の寒さで丸裸にされた木々が立ち並ぶ。南側を見れば、春を迎えて穏やかさをもし出す広く青い海が広がる。俺は足早に、実家へと帰り、待っているであろう恵の元へと向かった。

しかし、それは空振りに終わった。

「え……？」

疲れて帰ってきた俺に両親から告げられた言葉。それは、恵が一週間ほど前、事故で入院したと言う事実だった。

俺は慌てて恵の入院する病院へと自転車を飛ばし、聞いたとおりの病室へと向かった。

「し、失礼します」

病室に入ると、恵の母親、紗枝さんが傍に寄り添っていた。

「あら、哲哉君じゃない。驚いたでしょう？こんなことになってるなんて」

「ええ、知らされていなかったもので……。何があったんですか？」

「交通事故よ。横断歩道を渡ろうとしたところを、車にぶつけられてね。ただ、怪我のほうはたいしたことがないんだけど……」

そう言うと、紗枝さんは視線を落とす。

「う、うう……ん……？」

俺達の会話が聞こえたのか、恵がふと目を覚ます。

「あ、恵。大変だったな、事故なんて……」

「あれ、お兄さん……誰？」

「え………？」

”お兄さん”？ 確かに恵は、俺のことをそう呼んだ。

「……お兄さんは、恵を心配して来てくれたのよ。ほら、体に障るから、ゆっくり寝てなさい？」

「ありがとう、おばさん」

”おばさん”！？ 母親のことを、おばさんと呼ぶなどとは、どう考えても不自然だ。俺が考えていることを察したのか、紗枝さんは恵が寝付いたのを見ると、俺のほうに向き直った。

「今ので気づいたかも知れないけど、ちょっと記憶が混乱しているらしくてね。お医者様の話だと、一時的な記憶の混乱らしいんだけど……。でも、治るも治らないも確率は五分五分だそうよ」

「そ、そんな……」

目の前が真っ暗になる。4年間、一日たりとも忘れたことがなかった恵が、まさか、こんなことになってしまっていたなんて。

「……今日のところは、帰ったほうがよさそうね。ごめんなさい、哲哉君」

「あ、す、すみません……。俺のほうこそ、急に押しかけてしまっ
て」

俺は紗枝さんに一礼すると、逃げるように病室を飛び出した。シ

ヨックであふれ出した涙を、紗枝さんに見られたくはなかったから。
……なぜなら、一番泣きたいのは、紗枝さんなのだろうから。

それから1週間。桜の蕾がひとつ、ふたつと開く頃になっても、
恵の記憶は戻らなかった。

『帰ってきたら、また2人で桜を見よう』

その約束が果たせるのか、俺は不安だった。……いや、それより、
俺のことを永遠に思い出してはくれないのではないか、それが何より
不安だった。

「じゃあ、私はもう、帰るわね。……辛いだろうけど、私たちには、
ただ祈ることしか出来ないわ」

紗枝さんは俺に一礼すると、病室を後にした。後には、眠りに落ちた
恵と俺だけが残される。

「本当に、俺のことなんて忘れてしまったのか？」

眠っている恵に、そつと問いかける。当然、恵からの答えはない。
俺は引き裂かれそうな心を押さえ込み、そつと恵のか細い手に触れる。

「恵、覚えてるか？ 4年前、俺が旅立つ前の最後の日。あの公園の
早咲きの桜の前で、4年後こうしてまた桜を見ようって、そう約束
したことを、さ。あの日以来、俺はずっと、その日を思い描いて、
東京での辛い生活も、なれない1人暮らしも、恵とのメールと、そ
の約束だけを胸に耐えてきた。……この声が聞こえているかは分か
らないけど、俺は一週間後、満開の桜の下で、ずっとお前を待つて
る。あの、約束の場所で」

「……………」

恵は何も答えなかった。ただ、俺が握った恵の手のひらは、俺の
言葉に頷くように、そつと俺の手を握り返してくれたような、そん

な気がした。

そして、約束の日。俺は朝一番から、公園の桜の前のベンチで、恵をずっと待ち続けた。

あの日以来、俺は恵の病室には行っていない。恵が退院したとか、そんな話も俺の耳には入ってきていない。

次第に日は高くなり、花見客でだんだんと公園がにぎわってくる。いつしか、公園の時計は二つの針が上を向いて重なり合い、太陽は真上に昇っていた。俺は近くのコンビニでおにぎり1つだけを買って、またベンチに戻る。そして、だんだんと日は傾き、桜の薄紅色に橙色が合わさって、何とも味わい深い色に変わる。少しうたた寝して、ふと目を開けると、既に空には月が昇っていた。時計を見ると、もう夜の8時過ぎ。花見客も殆ど帰り、公園に俺は1人取り残されていた。

自販機でコーヒーを買って、一口飲む。吐き出した息が、夜の寒さで白く煙る。

「……やっぱ、来ないのかな？」

誰に問いかけるわけでもなく、俺はそっと呟く。

そもそも、無謀だったのだろうか。恵に直接話したとはいえ、あいつは眠っていたし、紗枝さんにも俺の両親にも言っていない。そんな一方的な約束、守れと言うほうがどうかしている。いつの間にか、時計は深夜の11時を回っていた。俺は小さなため息を一つつき、そっと目を閉じた。

「……ん、やべ、寝ちまってたか」

ふと目を開けて時計を見ると、時刻は既に深夜の1時。薄着で来た所為か、俺の全身は氷のように冷たくなっていた。だが、手袋もしていないのに、俺の右手だけが妙に温かい。

「……え？」

そっと手元を見る。白い、フリース地の手袋に包まれた、暖かい手。

「な………」

右側を見ると、そこにいたのは……、恵だった。白いマフラーをして、小さな寝息を立てている。

「……えいっ！」

「うひゃっ!？」

俺は恵のおでこに弱くでこピンをすると、恵は小さく声を上げて起きた。

「あ、ご、ごめんね、哲ちゃん……」

「ばか。遅えよ。俺が何時間待ったと思ってるんだ？」

「うん、分かってる……。ごめんね……。きやあっ!？」

恵はそう言っ、俺に笑顔を見せる。そんな恵を、俺は無理やりに抱き寄せた。

「……て、哲ちゃん？」

「なんで、気づいたなら直ぐに連絡くれないんだよ。てつきり、まだ記憶が戻ってないものだと思ってたぜ」

「うん。実は、私、昨日病院から出てきて、家で休んでただけど……。ついさっき、突然夢の中に哲ちゃんが出てきてね。それで、全てを思い出したんだと思う。寒空の下で、ずっと桜の下で待つ哲ちゃんを見てたら、何だか、いてもたってもいられなくなって。飛び起きたら、お母さんの顔も、私の身に起こっていた全てのことも、理解できるようになってた。お母さんはまだ出て行っちゃいけない、

って言ってたんだけど……。何でだろうね。哲ちゃんがここですつと待ってるのが分かったんだ」

「そうか。それを聞いて安心した」

恵の話聞いてるうちに、自然に恵を抱き寄せる手に力がこもる。

「……哲ちゃん、何だか声が震えてるよ？」

「何、ちよっと寒いだけだ。……お帰り、恵」

「……うん。私も言うのが遅れちゃったけど、お帰り、哲ちゃん」

恵もまた、そんな俺の背中にそっと手を回してきてくれた。恵のぬくもりが、冷えた体を少しずつ温めてくれた。

「ねえ、哲ちゃん。この桜の木の話って、知ってる？」

ライトアップされた木にそっと近づき、木の幹にそっと手を触れる恵。

「え……。いや、古い木って言うことくらいしか知らないけど」

「昔ね。この木は、戦争で焼け野原になった場所に、唯一無傷で残っていた、不思議な木なんだって。だから、戦争で出て行った人がこの地に戻ってきたとき、この桜の木を目印に、崩れ落ちた我が家を探して、帰ってきたって言う話なんだよ？」

「へえ……。それは、初耳だな」

「だから、私は思うんだよ。きつとこの木は、戦いで命を懸けてきた人達が帰ってくるときの目印となる、大切な木。そして、私にとってこの桜は、哲ちゃん自身。私がこうして帰ってこれたのも、哲ちゃんが崩れてしまうことなく、ずっと待っていてくれたからだと思うから。きつと、この桜の木のご加護なのかもしれないね」

恵はそう言うと、俺のほうを見てにっこりと微笑む。

「そうだな。それなら、俺にとってのこの桜は、恵自身なのかもしれないな。4年間東京で過ごしてきて、帰ってこれる場所があった

のも、恵が変わらずにいてくれた、それが何より俺を助けてくれたんだから、さ」

「……でも、私は哲ちゃんのこと、一時的とは言っても忘れてたんだよ？それじゃあ……」

「いや、間違いない、恵は俺にとって、この桜と同じように、ずっと俺を待ち続けてくれていた存在だったよ」

俺はそう言って、満開の桜を見上げる。

「桜っていう木はさ。こうして満開の花で飾っているときは、沢山の人間から愛され、そして敬われているだろ？……でも、夏が過ぎて、冬が来て、葉っぱすらも全て落ちた後は、人間は桜の木になんて見向きもしない。でも、桜の木は花の咲かせ方を忘れたわけじゃない。しばらくの間、思い出せなかったただけなんだ。だから、春が来ると桜は思い出して、一年前と同じように、立派な花をつける。恵だって、本当に忘れてしまっていたのなら、今こうして、俺の前にはいてはくれなかったと思う。……思い出せなかったものだって、こうして思い出してくれたなら、それで十分だろう？」

「……うん、そう、なのかな？」

恵は赤くなって、複雑な笑みを浮かべた。

「それじゃ、改めて。今度は、俺の人生にとって、これからもずっと、俺の帰ってくる目印となる、桜の木であってほしい。……どうかな？」

「……うん。もちろんだよ」

俺の申し出に、恵は真っ赤になりながら、小さく頷いた。そんな俺達を祝福するかのように、桜は風を受けて、沢山の花びらを散らせ、無機質なアスファルトの足元を彩ってくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6503v/>

桜花の約束

2011年8月20日14時49分発行